

第248回

「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(令和7年12月)句会記録

12月です。日を追うごとに朝夕寒くなって来ました。これまでひと月ごとに破いてきたカレンダーも、あと一枚ですね。世の中はあっという間に年末ムードに。街はLED電飾による煌びやかさ、クリスマスのメロディが流れています。往来のビジネスマンの動きもスピードアップされてきました。これでいつもの年末の様相です。

そんな中、「道草」句会は12月8日(月)に新橋ばる一で開催され、下述の通りのメンバーが集まり、選句の結果を披露しました。その間、言葉の使い方が疑問に思われる箇所の指摘、推敲不足が顕著な箇所の指摘などを討議しました。今月の投句参加者並びにリアル句会への参加者は次の通りです。

12月投句に参加された方(13名)

井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、舩戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。
(板倉歌多音さんは、選句に参加しました)

句会に参加された方(7名)

和感さん、月草さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、柴楽さん、白然。

本日の優秀句並びに獲得票数

12月の優秀句、並びにその中から天賞に推挙された句と、最多得票賞(☆印)の句は、下述の通りです。

◎『大仏の耳をくすぐる煤払』	晶如	天3☆9
◎『タクシーの点灯早き夕時雨』	栄女	天1☆5
◎『風邪かなと夫炊きくれし三分粥』	荻女	天1☆5
◎『北風や幼剣士の面構え』	傘吉	天1㊦3
◎『小春日や小江戸の薨黒光り』	清助	天1㊦3
◎『毛糸編む母の指から愛かたち』	柴楽	天1㊦2
◎『庭からの黄色の柚子の贈り物』	蒼樹	天1㊦2
◎『包まるる毛布を出づる乳児の足』	白然	天1㊦2
◎『極月の酒腸に沁み来る』	白然	天1㊦2
◎『祖母勝ち気炬燵のゲーム悔しがり』	柴楽	天1㊦1
◎『菊膾はきはきものを言う女』	荻女	天1㊦1

晶如さんの句「大仏の耳をくすぐる煤払」が、最多得票賞9票を獲得しました。そのうち3票が天賞で、「大仏の煤払い」という難儀な作業を「耳をくすぐる」というユーモアたっぷりの表現で和ませ、読者の共感を得られたのだと思います。一つの句に9票という高得票が集まったのは久しぶりではないでしょうか。選句の纏めに紹介された「天賞推挙のコメント」も素晴らしいので、森田さんがまとめられた「選句の纏め」も是非ともご覧下さい。

次に栄女さんの句「タクシーの点灯早き夕時雨」が、得票数5票、天賞一つを獲得しました。「短日」と言われる今日この頃、栄女さんの句は、夕時雨に見舞われたタクシーでの出来事、辺りの景色は一層暗く、作者にはタクシーの点灯がさらに早く感じられたのでしょう。この句は何度も読んでいますと、読者には寒さすら感じさせます。

同じ得票数と天賞一つ獲得した荻女さんの句「風邪かなと夫炊きくれし三分粥」は、「風邪かな」と夫が炊き、温かい三分粥を炊き始める光景が思い浮かんで来て、老々の暮らし

の中での、ほのぼのとした夫婦愛が何ともつつましく思えました。

次に傘吉さんの句「北風や幼剣士の面構え」ですが、得票数3票、天賞一つを獲得しました。上五の「北風や」で少年剣士の寒稽古が想像され、引き締まった顔、凛々しい態度に、幼剣士が頼もしく思えてきます。印象に残る一句でした。もう一句、ここでも同じく得票数3票、天賞一つを獲得した句があります。清助さんの句「小春日や小江戸の薨黒光り」です。川越へ旅行されており、そこから発信した一句と伺いました。電線の無い川越のすっきりとした光景、黒光りの薨が見えてくるようですね。

今回の句評についてはこの辺りで止め、句会での討議の一部を紹介いたします。皆さんは「下五の名詞止」という言葉をご存じでしょうか。俳句のスタイルというか、格好についての言葉ですが、傘吉さんの句で言えば、「幼剣士の面構え」で止めている句を、「幼剣士の面構」というように、「え」を書かずに「面構」で止めるのが、俳句のスタイルがスマートだそうです。また、原句にある「え」は、文語体では「へ」ですから、「面構へ」でなければなりません。いずれにしましても、「面構」を使った句を検索ソフトで調べますと、二つのケースを実例で見ることが出来ます。

「冬ざれや石それぞれの面構へ」 若井新一

「墓出でて文句あるかの面構」 玉田春陽子

また冬の季語「冬構」を見ますと、「冬構へ」とせず「冬構」となっています。思いますに、俳句の肝腎なことは句の内容です。こうした格好に囚われすぎるのは、どうかと思うに至りました。句会での討議した意見の結論としては「格好に囚われないようにすること」にします。今回の討議で、小生が余計なこの句への「ひと言」で、「面構え → 面構へ → 面構」と書きました。これからも聞かれれば、こうした考えのあることは言いますが、それに止(とど)めます。句会では大変失礼いたしました。

もう一つ言わなければならないことがあります。先月の句会では私も「冬の季語」を詠まなければならないのに、「行く秋」という秋の季語を詠みました。そのことを句会記録でも「気をつけよう」と書きましたが、今回も「冬の季語」の指示に対して、「秋の季語」の句が、三句ありました。

もう一度書きます。

「指定をされた季語を使い俳句を読むこと」

「文語体で句を詠むこと」

「舌頭千転、推敲に時間を取りましょう」

もう一つ、今句会でも話題に上がりましたが、来年2月の句会で、「道草」は250回目の句会を迎えることになります。この句会を一括りとして「250回記念の句集」を発刊しようとの討議がなされております。今まで100回記念、150回記念、200回記念と、3冊の句集が発刊されております。

3冊目の前回の200回記念の句集は、令和3年10月に105頁に及ぶ句集が、発刊されております。是非とも今回も250回記念の句集を作りたいものです。

奥田和感さんからは、自分の代表句を10句選句しておいて下さいとの指示がありました。

2026年1月、皆さん元気に集まり、「道草」俳句を楽しみましょう。

皆さんどうぞよいお年をお迎え下さい。

(白然記)